

文化映画 紹介

渡部実

映文連アワード2009

日本と世界の優秀企業映像を見る会 レポート



[NOBODY'S PERFECT]

に入り込んでも同業の室内清掃者に気づかれたり、仕事場の人に不審者のようにも見られる。ようやくホットドッグを手にした男はそれを食べるもそれによって体重がわずかにオーバーした為に、哀れ、作業台から落ちてしまう。そこで画面には「高脂肪食品と運動不足は健康の敵です。体に深刻な影響を与えます」とのテロップが出る。

4分30秒)が上映。港には船によってさまざまな物資が運ばれてくる。画面には2人のダンサーが登場、モダンダンスの感覚で港を舞台にダンスをしつつ、そこに港の持つさまざまな機能が紹介され、テロップも「深海」「戦略的ロケーション」「北海主要港地域」「紙」「木」「バルク BULK」「鋼鉄」「果物」「食物」「ローリー船」「雇用可能性」「教育」「進歩」などなど、港にはそれこそ数多くの要素が行き来して国と国同士の発展に寄与しているという印象をくれる。画面は「生活」「仕事」「努力とダイナミズム」の動機を黄金分割を思わせるような2面、3面分割で紹介、ギリシャの4大元素の水・空気・土・火のイメージを背景にダンサーが舞踏をくり広げる。芸術性の香り高い作品である。

一方、教育問題を扱った作品も登場した。「SO THAT NOBODY FEELS LEFT ALONE」(フィンランド、企画/Mannerheim League for Child Welfare and Folkhalsan、7分)は学校のイジメ問題に関する5編の短編をまとめた作品である。イジメは子どもの世界には何処でもあると思われる。そこでこの内容は学校生活でちょっとした相手との触れ合いや、意志の疎通、思い込みなどがそれにつながるという瞬間を一般例として紹介、それらを広く共通したイジメの原因として提起している。子ども問題をとり上げたガイドブックと言えるもので、生徒や教師、父兄が参加する会合やセミナーなどで上映される為に製作され、スウェーデン語とフィンランド語で作られ両国の学校に配布されたという。

そしてまた人権という観点から製作された「NOBODY'S PERFECT」(ドイツ、企画/Westdeutscher Rundfunk Köln、14分30秒)。本来は本編64分の作品だが、今回の上映では時間の都合上、前半のみが上映された(は、今回の上映で最も見つけたえがあり、考えさせ

られたドキュメンタリー作品であった。登場するのは、ニコという一人の中年男性。ニコはサリドマイド薬の副作用によって両手に障がいを持っている。彼は同じ障がいを持つ人たちに自分たちのありのままの姿を見てもらおうと、裸のカレンダーを作りたいたので、ついでにそのカレンダーのモデルになってくれないか?と訪ね歩く。そこでニコはいろいろな仲間と出会い、お互いの気持ちを語り合うというものである。この作品を見ていると、製作国のドイツ、ひいてはヨーロッパの人権に対する意識、考えが日本などかなり違うことが感じられる。もともとこのような障がい者が自分たちの立場を主張し、何かを作ることによってその偏見を取り去ろうとするアクティブな発想がまだ日本には希薄なのだ。障がいを持つ実際の人たちが登場し、今までの体験を身近な立場で語るの、この作品に含まれている問題意識と主題の深さは充分に伝わってきた。企画はドイツの団体であり、団体の側からこのような作品が生まれているので、日本の団体、法人、企業などはもっと幅広い社会的視野を入れた映像作品を企画してもよい。

映文連アワードのこの上映会は毎年行われるが、このような人間の権利と福祉に向かい合った作品も、毎回、上映される。日本の企業、映像製作者には参考になることであろう。その他にも企業、香港のTVコマニシャル映像作品などが上映され、好評であった。

企業映像作品は企画者、クライアントがその作品に社運を賭けているといっても過言ではない。数分の作品でもそのアイデア、カット割りなどに、見るべきものが多くある。次回の「映文連アワード2010」日本と世界の優秀企業映像を見る会」にも期待したい。(問合せ先)社団法人映像文化製作者連盟 TEL 03-3279-0236、FAX 03-3279-0238)

今回は3年前より開始され、短編映像コンクールとして脚光を浴びつつある「映文連アワード2009」(主催/社団法人映像文化製作者連盟)の一環として毎年、表彰式当日に行われている「第12回日本と世界の優秀企業映像を見る会」の模様を紹介したい。

この上映会はアワードと合体するまでは10年近く独自で開催されていた貴重な上映会である。今回は全11本の作品が上映された。上映作品はドイツで開催されている14のカテゴリからなる国際映像祭「World Media Festival」や、1967年創設のアメリカで開催されている、毎年20数カ国から応募のある「US International Film and Video Festival」などからの入賞作品が揃い、各国の個性が出てくる力作も多く、十分に楽しく、刺激を受けた上映会であった。以下、印象に残った作品に言及したい。

まず今年2010年をモチーフにした「RUHR. 2010」(ドイツ、企画/RUHR. 2010 GmbH、6分)。これはドイツのルール地方の、今をPRした内容。ルール地方は昔の工業地帯からハイテク産業中心の文化圏として変貌しつつある。1000の産業遺産、2000の博物館、1200の劇場、人口530万人、続々と流れるテロップに「それは北京のことですか?」との質問がくるが、あとの映像でそれは「2010年のルールである」と描き切る。歯切れのよい編集によって地域の活性化を印象づける。同じく「TOYOTA iQ. SMALL BUT SMART」(ドイツ、企画/TOYOTA Motor Europe、3分)は2008年、パリモーターショーでお披露目されたドイツ製作のトヨタ自動車のPR作品。色彩豊かな映像表現に加えて外国人の描く日本の都会もカラフルな感覚で描かれ、日本の自動車を見る印象が違って見える点が面白い。

「VOLVO FH16/BEYOND PERFORMANCE」(スウェーデン、企画/Volvo truck Corporation、2分)も重量級のボルボのトラックが米